

自記年譜

佐佐木茂美

昭和九年（一九三四）十月、父 佐佐木茂十（モジユウ）、母 節子（ミサコ）の長女として東京都に生る。父方は福岡県を本籍とし曾祖父、祖父ともに漢籍を読み書道を教えた代書。現韓国と北朝鮮の国境に祖父母は移り住み、その地から父は東京に留学（現一橋大学）。母方は現文京区内の地主、維新前から歌舞伎の小道具方藤波与兵衛の二代に渡る夫婦養子、伝統芸術の雰囲気と父方の学問好きとを同時に受けたものと思われる。

（両親の兄弟やまた直接の兄弟等の傍系は「個人情報」が云々される折から、必要の場合のみその都度記入の予定）。

昭和十六年（一九四一）四月、豊岡国民学校（横浜市鶴見区）に入学。四歳頃から父は陸軍少尉として満州に召集、入学時に両親に付き添われていたが、ビルマの激戦区へと將校としてほどなく去る。同国民学校四年、学校単位での強制疎開（昭和十九年（一九四四）九月）で神奈川県足柄上郡へ。饑餓と不潔と景観のコントラストに身を置く。一応の食事と洗髪の「行事」は積極的な児童のみ可能。ケジラミの発生源となり、全員に蔓延、「行事」は「事件」へと変貌。親にも訴えず（検閲があった）。昭和二十年（一九四五）六月、静かな虚弱児は母に引取られ、家族の疎開地（群馬県の榛名山の寒村）へ。貧困もあって

その間に妹は亡くなり、戦時下に母を助けていた祖父も没す（その間三ヶ月）。八月、敗戦を電氣のない山中で知る（十歳、新聞配達をしていて当日情報を得ている）。昭和二十一年（一九四六）七月、九死に一生を得た父の帰宅、翌月、横浜市鶴見区の知人宅に寄寓（疎開前の家屋取壊）。

昭和二十二年（一九四七）五月、豊岡国民学校卒業（学制改革で四月一杯は同校で勉ぶ）。九歳で受けた栄養失調による衰弱は戦後の食糧難と相まって解消せず、近隣の鶴見女子中学校を入学先に選ぶ。昭和二十四年（一九四九）、中学三年、遂に肺結核に倒れ、母方の祖母に伴われ（船路）北海道斜里の牧場に長期療養、ほぼ一年完全休学。昭和二十五年（一九五〇）四月、出席日数不足のまま、中高一貫校のためか同高等学校入学。父の召集の長期化とその健康による経済状態の逼迫から一年弱前からのようやくの好転があった。それほどの余裕もないはずであったが、父は母校（一橋大）に洋書の寄贈を旧友（増田四郎、後に同学学長）の研究室等に、かつ医学生（東大）後年は息子の同級生（同大学）に奨学金を出し自宅で食事を供す等、娘たちのアメリカ留学、外人学生の家族内受入れ等父がライオンズ・クラブ代表であった事の環境がこの頃からあった。病弱。昭和二十八年（一九五三）三月まがりなりに卒業。

昭和二十九年（一九五四）四月、早稲田大学第一文学部（仏文学専攻）入学。中学三年時にフランソワ・ヴィヨンを読み、アルチュール・オネゲールの『火刑台上のジャンヌ・ダルク』の音楽、同名の映画を観てフランス語、および中世の仏文学に憧れた結果の選択であった（ヴィヨンは生年とジャンヌ没年が同じと、中三で知っていた）。ヴィヨン研究で高名な佐藤輝夫教授のいる早稲田大学が受験した唯一の大学で

あった(他大学に中世学者がいるとは知らなかった)。受験日当日その脚でアテネ・フランスに登録、翌日からフランス語初級クラスに入、五月から初級後期クラス、ラテン語、ギリシヤ語等を始める。すべて直接教授法で古典語教授もフランス語でなされ、全授業料免除。現在各界で活躍のひたすら勉学の人々の輪があった。大学では一学年次は上級生の外人教師の時間全てを聴講。他に現代ヨーロッパ諸語、中世フランス語を上級生のクラスで学習。「仏文研」の自主講座、「カトリック研究会」に入部、真正会館および上智大学の神父に神学基礎を学ぶ。学び舎各所、この期の友情は代え難いものがあった。昭和三十三年(一九五八)三月、同大学卒業。

昭和三十三年(一九五八)四月、早稲田大学大学院(仏文専修)修士課程入学。昭和三十五年(一九六〇)三月、『シャルルドレアン詩における「運命」の擬人化について』で修士号(学部において指導教授佐藤輝夫)取得。同六月、アテネ・フランス高等科卒業(diplôme)。昭和三十六年(一九六一)四月、博士課程編入、同六月アテネ・フランス「フランス語教授資格」(Brevet)、および「ラテン語教授資格」(Brevet)取得。

一方、昭和三十四年(一九五九)から東京日仏学院の通信教育の添削者(同三十八年(一九六三)十月まで)となり同学院高等科に授業料免除で入学、昭和三十六年(一九六一)三月、卒業(首席)。

昭和三十八年(一九六三)十月、大学院在学中にフランス政府の留学生試験を受験、オール・ギャランティの同国留学生(Boursière)として、パリ大学(ソルボンヌ)に学び、ジャン・フラピエ氏より研究要約(手書き三百余頁)提出により指導教授の承諾と博士論文提出の激励を受ける。同大学音声学研究所、音声学講座(昭和三十九年(一九

六四)二月)終了、同完成講座(同六月(成績 excellent、ネイティブと同発音の保証)。同年ほぼ五ヶ月、スイス、伊、南仏各地、西、英、独、和蘭、ベルギー、および北仏各地をもっぱら飛行機で回る(東京パリの航空券は一年有効で旅は無料)。同年七月、奨学金を得て「中世文明講座」(於ポワティエ、受講者は大学院生ないし助手クラス)で講師陣オメール・ジョドニー(ルウヴエン大教授、ベルギー王立、翰林院会員)、レイノー・ド・ラージュ(クレルモンフェラン大)、レト・ベッツォーラ(ジュネーヴ大)、ルネ・クロゼ(ポワチエ大)等の学者たちの知己を得る。同九月、バルセロナ大での「国際叙事詩学会(ランセスヴァルス)」に講演のため来た佐藤輝夫教授に合流、日本人中世学者による国際学会の初の舞台に立会う。本学会直前に倒れたフラピエ教授に同会会長ピエール・ル・ジャンティ教授(ソルボンヌ)は、夫妻の間に席を設け高名な学者達(マルチン・ド・リケール(バルセロナ大教授等)に紹介された。昭和四十一年(一九六六)十月、フラピエ教授はフランス政府の特別文化使節として来日。師の希望で、留学中であつたが夫妻と佐藤輝夫教授とを両親は自宅に迎かえる。昭和四十二年(一九六七)夏はプラハの伯父(チエッコスロヴァキア大使として着任)の許で三年ぶりの両親との再会、二年前からフィレンツェに留学していた妹も合流、一家で一ヶ月余を過ごす(当時、大使館という公的機関以外に共産圏へ入国滞在は不可能)。

昭和四十二年(一九六七)九月、ソルボンヌに論文提出、同四十三年(一九六八)三月、公開審査を通過、文学博士号取得(très honorable)(指導教授および主査ジャン・フラピエ、副査ル・ジャンティ、アレクサンドル・ミシヤ(ソルボンヌ))。表題『シャルルドレアン

ン詩における「無関心」の主題について』(Sur le Thème de Noncha-

loir dans la Poésie de Charles d'Orléans)。中世仏文学でフランスにおける日本人の学位取得の嚆矢となる。パリ国立図書館での勉学の日々と、仏語で書かれた論文の、フラビエ教授夫妻のチェックが交互になされた。O・ジョドニー教授は論文提出まで自宅書庫・書斎を明け渡し、ジャンヌ・リヂ・ゴレ教授(ソルボンヌ)等、毎週末の家族の食事に招いての励ましも常時あった。師J・フラビエは高弟フィリップ・メナール(後にソルボンヌ教授、一九九二年および二〇〇四年来日、本学で講演)と二名、自宅に招んで引き合やす等、絶えざる保護と高い評価を極東の留学生に向けられていた、それなくては論文完成はあり得なかつたろう。昭和四十年(一九六六)九月、三年のフランス政府国費留学生資格の期限が切れ、フランス国立科学センター(Centre National de la Recherche Scientifique)の研究者として採用さる。Dongierの擬人化を『薔薇物語』まで遡求させた拙稿を中世学の泰斗は提出資料として選び、フェリックス・ルコワ教授(翰林院(碑文・文芸))とともに推薦の労をとられた(至昭和四十四年(一九六九)、フランスに居残ればそのままその職に、というものであった)。

昭和四十三年三月末、パリを発ちギリシャ、イスラエル、中東を経て帰国(この旅は四年半の滞欧中、休暇毎の欧州各国の美術館・教会巡りや渡欧直後からのフランス政府の招待でのコメデー・フランセーズやオペラ、音楽会等と同様に強い印象を受ける)副鼻腔炎で入院、手術(極度の栄養不良による、という診断で頭蓋骨にも損傷をきたしていた)。同十月、予後をおして「日本フランス語フランス文学会」総会(於関西学院大学)で博士論文の報告(所収、同学会誌(EILF,

N. 16))。

昭和四十四年(一九六九)三月、早稲田大学大学院博士課程満期退学。当面、就職口なし。昭和四十五年(一九七〇)一月、東京日仏学院講師(モンテーニュを講ず)(至同七月)。

昭和四十五年七月、「フランス政府招聘教授」として再渡仏(至同四十六年(一九七一))。渡航費、滞在費、研究費全て先方持ち、ソルボンヌに配属、集中講義およびパリ国立図書館等での研究。フラビエ教授夫妻の山荘への招待を含む交流の全てが続いていた。ジャン・デュフルネ教授(ソルボンヌ)を師より紹介される。昭和四十七年(一九七二)四月より早稲田大学、アテネ・フランセ、独協大学、神奈川大学で初級フランス語を教える。昭和四十八年(一九七三)年、明星大学一般教育助教授、昭和五十四年(一九七九)四月同大学教授。平成元年(一九八九)四月、同大学院人文学研究科英米文学専修教授(至現在)。昭和六十年(一九八五)四月、早稲田大学大学院文学研究科仏文専修講師(中世仏語学)(至平成六年(一九九四))。平成五年(一九九三)四月、明星大学日本文化学部、言語文化学科教授(ヨーロッパ文化論、比較文化特論、日仏比較文化演習、原典購読、フランス語担当)(至現在)。

昭和四十六年(一九七一)七月、フラビエ教授からの連絡で「国際仏文学研究協会」(AILF)(於コレージュ・ド・フランス)開催日に再履修夏期講習を終えて駆けつける。玄関口にフラビエ教授(会長)と次期会長フランコ・シモーネ教授(トリノ大)、O・ジョドニー教授がいて、両教授よりシモーネ教授に紹介される。中世から現代を網羅する重要な専門誌『仏学誌』(Studi Francesi)の主幹で、以降三十四年我が国の研究を国際的に知らしめるべく関わる事となる(同誌

はほとんど知られなかった日本人の研究をその時点から採り上げる事になる。

昭和四十八年（一九七三）、『佐藤輝夫教授記念論文集』（*Mélanges Tenuo Sato, Nagoya, tome I*）の編纂で師の「著作目録」作成を担当師のチェックも受ける。ジャン・フラピエ、フェリック・ス・ルコワ、ピエール・ル・ジャンテイ、ジャン・ジュフルネ、ポール・ズムトール、ヘルマン・ブラート等錚々たる一一の外国人の論文集成。

昭和四十九年（一九七四）八月、フラピエ教授の尽力で学位論文がパリで刊行（Nizet書店）（ソルボンヌから刊行費が一部出た）、師は自ら指揮し、年頭より促されての渡仏。山荘（ヌムール）迄の四キロの往復を駅に令孫と共に出迎えられた師より、拙書を受ける。その折「国際アーサー王学会」——師は創立者の一、当時会長であった——にぜひ出席するよう（昭和五十年（一九七五）、於英エクセター）懇憑され、日本におけるアーサー王関係の論文／著書の紹介を求められる。手始めとして、フラピエ教授は自身も寄稿している『佐藤輝夫教授記念論文集』（多くがアーサー王関係の論文）の書評をするようにとの明確な指示があった。忘れがたい散策の日は再び駅頭に立たれた師の最後であり、師にまみえた最後の弟子となった。

昭和五十年七月、①「国際アーサー王学会」（於エクセター）でシャルル・フーロン会長（レンヌ大）より依頼を受け正式に学会誌、日本関係担当（*correspondante*）となる（至昭和五十六年（一九八一））。（当時、日本人会員は英仏文学者を中心に数名のみ）。②『仏学誌』（No.五十二）にF・シモーネ教授による筆者紹介が出、渡辺一夫教授（東大）の研究を手始めに日本関係が初めて誌上に載る。③昭和五十年四月、父急逝。

昭和五十二年（一九七七）三月、①『シャルルドルレア誌研究』（単著フランス図書）、（邦文）、七七二頁（文部省「研究成果刊行費」による）。②この期まで、主な論文は「日本フランス語フランス文学会」にまず発表（仏語）、同学会誌（*ELLF*）所収のNo.十六（一九七〇）、No.二十二（一九七三）、No.二十四（一九七四）、No.二十八（一九七六）、No.三十二（一九七八）、五論文（仏語）。

昭和五十三年（一九七八）七月、①「国際アーサー王学会」総会（於独レーゲンスブルク）で研究発表。年頭よりフーロン会長とダニエル・ポワリオン教授（ソルボンヌ）よりフロワサールの主題での発表要請があり、ユネスコの学術奨励金が与えられる。②同年八月、「国際宮廷風文学会」書誌担当（同会（名）会長レイモン・コーミエ教授よりの要請）。③同年九月、フランス国立リヨン大学外国語学部客員教授として日本文学・比較文学を講ずる。正教授と同じ給与と担当コマ数。地元リヨンの作家達やリヨン大学の教員との交流のほか、パリ国立図書館に休暇となるや勉学の日々でゴレ教授、フラピエ夫人、リュシエンヌ・マジュール教授（フィラデルフィア大）、O・ジョドニーニ教授、ピエール・ジョドニーニ教授（ブリュセル大）、等に招待を受け、『仏学誌』（編集スタッフとの交流等）の招聘でトリノ大で講演を行なったりもした。休暇毎に、独ウエストファリア地方のベネデクト会修道院にゲーテの保護者であったフォン・シュトルベルク伯家出身の神学者（修道女）のもとにも毎回半月は学ぶ。南仏ツールーズにはPh.メナール夫妻宅の招待の折、七月に「アーサー王学会」で同じくフロワサールの発表をしたミシェル・ザンク教授（現コレージュ・ド・フランス）等、数名のツールーズ大およびボルドー大現職教員と再会、いずれもメナール教授宅宿泊中に親交を深める。④滞在一年で延長を打

診され受ける、二年目(昭和五十五年(一九八〇)春、リヨン大学学長ジャック・グデ教授より終身の正教授の懇請がある。だが佐藤輝夫教授の強い希望で帰国を決意する(後任は現「日本フランス語フランス文学会」会長菅野昭正(名)教授)。同五十五年九月、帰国。十月復職。

昭和五十六年(一九八一)、①滞仏中に依頼を受けた『シャルル・フロン教授記念論文集』(*Mélanges offerts à Charles Foulon*) (第二巻、レンヌ)のシャルル・ドルレアン(時間)を扱った論文(仏語)②ヴィヨンの「夢」に関する論文(所収、フランス専門誌『中世』(*Le Moyen Age*) (フランスス・ベルギー)一九八一、仏語)③同年七月、「国際フランス文学研究会議」(AIEF) (於コレージュ・ド・フランス)でギヨーム・ド・ロリスとギヨーム・ド・マシヨオに関する研究発表(所収、同学会誌(CAIEF)、No.三十四、一九八二、仏語)④同年七月、「国際アーサー王学会」(於グラスゴー)日本支部成立承認に伴い、佐藤輝夫教授(会長)を補佐、書誌担当兼幹事(至平成五年(一九九三))⑤同年八月、論文(所収、『フランソワ・ヴィヨン』(細川哲士編、思潮社)⑥同年十二月、「現代文学国際連合」(P.M.L.A.) (於ニュー・ヨーク)に「国際宮廷風文学会」の提出主題「宮廷風文学の定義のために」にゲスト・スピーカーとして招聘される(所収、(P.M.L.A. 仏語)。

昭和五十七年(一九八二)①「日本学術振興会」の研究費で「国際アーサー王学会」幹事長ジャン・クロード・ロザクムール教授(レンヌ大)との共同研究「聖杯伝説の生成」を行なう(対象期間一九八二～一九八七)。「国際アーサー王学会」誌(*Bulletin de la Société Internationale Arthurienne*)に研究一部を「二つの仮説」として共著で発表

(二十四巻、仏語)②アメリカのノリス・J・レーシー同「学会」会長の主幹である専門誌『アヴァロンからカムロへ』(*Avallon to Camelot*)に三巻に渡って連載(一九八四～一九八五)(英語。第一巻はレーシー会長の仏語からの英訳で掲載される)③同年七月、児玉三夫学長の命で図書館充実のためパリの代表書店と交渉 *Romania* 誌、創刊号よりの購入等。

昭和五十八年(一九八三)①『フランコ・シモーネ教授記念論文集』(*Mélanges Franco Simone*) (トリノ)にモンテーニュに関する論文(所収、第四巻、仏語)(一九七四年論文依頼があって九年を経ての浩瀚な刊行)②同年三月、ジャン・デュフルネ教授の「日本学術振興会」招聘による来日講演(於名古屋大学文学部)の実現のために神沢栄三教授より「国際叙事誌学会」(於パルドヴァ、一九八二)で協力を(教授への来日の打診、紹介、空港への出迎等)を求められての実現③同八月、『聖杯の物語またはペルスヴァルの物語』(単著)(訳註書、抜粋)(大学書林)刊。

昭和五十九年(一九八四)七月、①「国際アーサー王学会」(於レンヌ大)、『聖杯の物語、第一続編』に関する研究発表(本発表により一七八年に続きユネスコの学術奨励金を受ける)。所収、学会『議事録』(*Actes du 1^{er} Congrès*)、第二巻、一九八六、仏語)。支部会長佐藤輝夫教授に代わり委員会に出席。ドナルド・マドックス(「国際宮廷風文学会」会長)と共に仏新聞二紙の一時間に渡ってのインタヴューを受ける(一紙は単独)。日本における「ブルターニュの素材」の伝播情况等②同年十月、論文、所収『アリス・プランシュ教授(ニース大)記念論文集』(*Mélanges Alice Planche*) (所収、パリ、第二巻、仏語)。

昭和六十年（一九八五）四月（至一九九五）早稲田大学大学院、中世フランス語を講ず。

昭和六十一年（一九八六）二月、①国際研究集会（於エクスピアンシップロヴァンス大）でユスターシユ・デシャンに関する研究発表（所収、CUERMA、一九八七、仏語）。②「国際宮廷風文学会」総会（於ユトレヒト）、シャルチエに関する研究発表。

昭和六十二年（一九八七）四月、①『聖杯の物語、第一、第二、第三続編』の教詞研究（早稲田大学大学院文学研究科『研究紀要』、No.三二、仏語）。②同年七月、「国際アーサー王学会」総会（於ルーヴェン大）でベルール本で伝説の原型が構造への変容を実証した研究発表（司会、レーシー会長）（所収、『トリスタニア』（一九九五））。委員会出席。

昭和六十三年（一九八八）①「国際アーサー王学会」支部総会（於本学（日野校舎）。佐藤輝夫会長、講演（伊藤泰治、神沢栄三教授）をオーガナイズする。②同年七月、『薔薇の物語』（単著）（訳注書、抜粋）（大学書林）刊。

平成元年（一九八九）二月、①「中世ルネッサンス研究集会」（於アリゾナ州立大）。日本に於けるフランス文学および中世研究についての研究発表。（所収一九九四）。②大学院人文学研究科英米文学科、兼担（至現在）。フランス文学特講、比較文学。③同年六月、『アーサー王伝説における聖域への船と道—中世ヨーロッパと日本の比較研究』（単著）（著書、中央公論事業出版、邦語および仏語）（本学新学部（日本文化学部）創設が佐藤輝夫教授の発案／意向のもと進んでおり文部省提出書類として「比較文化的アプローチ」での執筆を一九八八年に受けての対応。（刊行費等の申請の時間的余裕はなかった）。④同年七月、「国際宮廷風文学会」総会（於サレルノ）、クリスチヌ・

ド・ピザンの天と地の奥行きに関する研究発表。⑤同年、女神・擬人化パラスの研究、所収『ロマンス語誌』(Revue des Langues Romanes) (フランス) (第九十二巻、仏語)。⑥同詩人の『幻視』研究は本学『紀要』(人文学部)に発表No.二十一(一九八五)、No.二十三(一九八七)、No.二十四(一九八八)、No.二十五(一九八九)、No.二十六(一九九〇)、No.二十七(一九九二)(邦文)。

平成二年（一九九〇）八月、①「国際アーサー王学会」総会（於ダラム）。「鉞物」をキー・ワードとしたトリスタン伝説全域に関する研究発表（司会ダグラス・ケレイ（マデイソン大教授））（所収『ロマニア』以下該当年）②同委員会出席、学会誌のための日本のビブリオの特異性について問題提起をし、討議がなされれば現書式がきまる。

平成三年（一九九一）四月、①渡仏、集中講義（ソルボンヌ等）、②同年同月、日本フランス語・フランス文学会学会誌編集委員（一九八九年四月より）を①のため辞す。

平成四年（一九九二）十月、①ソルボンヌ大のフィリップ・メナール教授来日、マルコ・ポーロの彩色画入り写本に関する講演（於本学、日野校舎）の通訳（所収、本学日本文化学部『研究紀要』、No.二十九、一九九四、解説部を担当）。②同年七月、「国際叙事詩学会」（於ハーグ）、司会。

平成五年（一九九三）、①クリスチヌ・ド・ピザンの『勉学の道程』に関する論文（所収、『ジャン・デュフルネ教授記念論文集』(Mélanges Jean Dufoin) (第三巻、仏語)に発表。②同年六月、「日本フランス語フランス文学会」総会（於玉川大）で発表（所収、『学会誌』(ELLF) 第六十三巻、邦文）。以上二稿で文学伝承「知」と「旅」の図式の「革新」を指摘説明。③同年五月、早稲田の大学院先

輩の提唱で一九七七年九月(創刊)始められた同人誌『豎琴』第一次が解散。二十五年間の参加中、同誌の引き出しに入れてきた論文多数(邦文)。(4)同年八月、「国際アーサー王学会」(於ボン)、委員会出席。(5)同年十二月、『佐藤輝夫卒寿記念論文集』(第二卷)の刊行。刊行委員会(構成員三名)を結成、企画(フランス図書、二四一頁)。日本人寄稿のみ十六、師の著作目録(第一卷(一九七三)にあってもこの項目を担当したためその補遺を含む)作成および論文掲載。

平成六年(一九九四)一月、①刊行間もない一巻を携え、入院中の師をご家族(植田重雄氏夫妻と林桂子氏夫妻)等と見舞う。「間に合った」の安堵。(2)同年四月、佐藤輝夫教授逝去。(3)同年八月、「国際アーサー王学会」(一九八七)での研究発表(所収フランスの専門誌『ロマニア』(Romania)第一一一巻、(一九九四)仏語)④同年、論文所収『アレクサンドル・ミシヤ教授記念論文集』(Mélanges Alexandre Michia)パブリックライヴスヴァルト、仏語)。

平成七年(一九九五)、①「国際アーサー王学会」総会発表(所収、トリストアン伝説関係のアメリカの専門誌『トリスタニア』(Tristania)ニューヨーク、第十六巻(一九九五)仏語)。(2)ジャン・メナール教授(コレージ)よりソルボンヌと明星大学の姉妹校提携の打信あり。平成八年(一九九六)、①「アレクサンドル物語」諸本の「境界」と固有名詞研究(所収『リオネル・ソッジ教授記念論文集』(Mélanges Lionello Sozzi)パブリックジュネーブ、第一巻、仏語)。(2)同年六月、本学第八回公開講座(所収『青梅会報』九)。(3)同年七月、「国際アーサー王学会」総会、(於ミラノ大)。「アーサー王の死」の異界についての発表(「J・レーシー会長司会」)。および司会。(4)同十月、「日本フランス語フランス文学会」総会(於名古屋大)「神話と文学」のパネ

ル・デイスカッションに参加(司会、篠田知和基、阿部良雄、渡辺守章、吉田敦彦、小松和彦)(Cf. ELLF, No. 71 (一九九七))。

平成九年(一九九七)七月、①「国際フランス文学研究会」総会(於コレージュ・ド・フランス)。「世界の中のフランス語フランス文学研究」のパネル・デイスカッションに参加(司会、ジャン・メナール、コレージュ・ド・フランス教授、翰林院会員(碑文・文芸)) (所収、学会誌(CALEF) No. 五十(一九九八)、仏語)。(2)同年十一月、事故で両足に激痛始まる。

平成十年(一九九八)、①『散文トリスタン物語』および流布本系『ランスロ』における指輪と印章の研究論文(所収、『フィリップ・メナール教授(「国際アーサー王学会」会長)記念論文集』(Mélanges Philippe Menard)パブリックジュネーブ、第二巻、仏語)。(2)同年三月、①の再録(所収、「文部省科学研究費」(一九九六〜一九九八)による研究の一環で「報告書」「中世文学における旅(航行と騎行)の神話要素と動性の心性史的意味を問う研究」(一九九九)。(3)同年三月、日本に於けるアーサー王関係研究ビプリオ(仏文)。「新村猛記念論文集」(東京)等。(4)同年七月「国際宮廷風文学会」総会(於ヴァンクレーヴァー、ブリテイッシュコロロンビア大)。車椅子でカナダへ、研究発表(所収、フランスの専門誌『ロマニア』(二〇〇五)(印刷中))および司会(発表二、オクスホード大教授の日仏比較文学があったため、急遽コミエ(名)会長に代わっての司会)。テーマ「雅」。

平成十一年(一九九九)、①『散文トリスタン物語』における犬狗の介入に関する論文(所収、『フランソワ・シュアール教授(「国際叙事詩学会」会長)記念論文集』(Mélanges François Suard)リール、第二巻)。(2)同年三月、クレチアン・ド・トロワに関する論文(所収、

『神沢栄三教授記念論文集』。名古屋大)。③同年七月、「国際アーサー王学会」総会(於ツールズ大)、松葉杖状態で研究発表(所収、『ロマニア』(二〇〇五))と司会(フェルランパンシアシェ氏(ソルボンヌ)の博士論文発表)。④同年十一月、障害者認定を受ける(激痛と痛み止め服用の日々)。

平成十二年(二〇〇〇)三月、①本学『共同論文集』第三巻、②本学『研究紀要』No.八に樹木伝説および旅と「地上楽園」の二稿を刊行(これは樹木に関する主題研究、ほかに三稿と講演二(二〇〇三)、および(二〇〇五))がある。③同年五月、「日本フランス語フランス文学会」総会、(於明治学院大)、車椅子で『散文トリスタン』に関する研究発表(所収、『ロマニア』(二〇〇五)(印刷中))。④同年五月、ジャン・クロード・フォロン(ツールズ大大学院教授)来日講演(於明星大)(コーディネートと通訳)「ヨーロッパ中世の騎士像」。

⑤同年七月、「クリスチヌ・ド・ピザン学会」(於グラスゴー大)で車椅子で渡欧、研究発表(司会アンギュス・J・ケネディ会長)。

平成十三年(二〇〇一)二月、①樹木の主題に関する講演(於神奈川大社会科学研究所)②『東方見聞録』と『薔薇物語』の比較研究、所収『ジャン・クロード・フォロン教授記念論文集』(Melanges Jean-Claude Faucon)。③夏期滞仏中、ソルボンヌの友人による紹介の医師に緊急手術を言い渡され、急遽九月帰国。十月、自己血一二〇〇mlの採決の後に入院、手術(左足)(至平成十四年(二〇〇二)一月)。入院中、横臥状態のまま学生の希望でゼミ四コマ(三、四年生)を行なう。

平成十四年(二〇〇二)三月、①『中世フランス文学論文集』(Esmeralde et Jaspe) (単著) 第一巻(欧文篇(1))、四五七頁(本学

「研究成果刊行費」による刊行)。②同年三月、クリスチヌ・ド・ピザンの論稿(グラスゴー大(二〇〇〇))刊行(所収『同学会議事録』(Contexts and Continuities, 第三巻))。③同年八月、「国際アーサー王学会」総会(於ウエールズ大)、『散文トリスタン物語』に於けるトロヤ伝説の残滓に関する研究発表(司会、同学会名誉会長Ph.メナール教授)(所収、「日本フランス語フランス文学会」誌(二〇〇四))。④同年七月、入院、手術(右足)(至同年十月)。両足手術で約六カ月の入院、自宅療養(至現在)。「重度障害者」の認定がなされる。⑤同年十二月、「国際アーサー王学会」日本支部(於慶応大)研究発表(国際学会報告)。

平成十五年(二〇〇三)二月、①日江井栄二郎学長から、Ph.メナール教授招聘の意向が示され、本人に連絡、折からマルタ島(EU加盟国)政府の招待と重なり実現せず。②同年三月、『中世フランス文学論文集』(Voies et "Vergier", (単著) 第二巻(邦文編(I)、四四〇頁(学部研究助成金)による刊行))。うち二篇は新論文。③同年五月、「日本フランス語フランス文学会」総会(於独協大)で『散文トリスタン物語』のトロヤ伝説を発表(所収、同学会誌(二〇〇四))。④同年七月、二つの叙情的風景に関する学会発表(「国際クリスチヌ・ド・ピザン学会」、於ザルツブルク大)(司会A・レドロー会長)。

平成十六年(二〇〇四)三月、①『中世フランス文学論文集』(Voies et "Vergier" et Varia) (単著) 第三巻(邦文篇(II))、三七八頁。うち二篇は新論文。②同年三月、『散文トリスタン物語』中のPiere, Pomeに関する研究発表(「中世仏語の語彙に関する研究集会」、於広島大)。③同年同月、『散文トリスタン物語』の典故に関する研究、本学『研究紀要』(No.一二)。④同年四月、「澁澤栄一・ポール・クロ

デル賞」選考委員。⑤同年五月、「国際アーサー王学会」研究発表および「日本フランス語フランス文学会」研究発表論文(所収「日本フランス語フランス文学会」誌(BELF), No.八十四)⑥同年八月、「国際宮廷風文学会」総会(於マディソン・ウイスクンシン大)で『散文トリスタン物語』のガラッドの彫像に関する研究発表(司会、J・H・マッカシユ現会長)。⑦同年十月、本学創立四十周年記念一環としての「国際シンポジウム」および「學術講演会」(発案、氏原淳一学長、主催、言語文化学科)にPh.メナール教授と渡辺守章(東大名誉教授)を招き、その起案者、司会、通訳、メナール教授の滞在中のオーガナイズの担当を本学、他学、同学の協力があって成功裡に終える。東京日仏会館協賛での教授の講演を含む「報告」、所収本『紀要』No.十三)。

平成十七年(二〇〇五)二月、①最終講義。於本学大学院人文学研究科英米文学科。②日本フランス語・フランス文学会(関東支部)学会誌編集委員。③『散文トリスタン』(所収 *Romania* (二〇〇五))。④『学会議事録』(ザルツブルク大)。(二〇〇五)⑤『記念論文集』(フランス、(二〇〇五))。⑥『吉田敦彦教授記念論文集』⑦『国際シンポジウム』と「国際學術講演会」(本学創立四十周年記念刊行物)の編集責任者となる。以上③④⑤⑥⑦が校了、ないし印刷中、ないし近刊。

本「年譜」では邦語論文の大方およびジャーナリズム関係等は省略。また一九七一年から毎年、日本フランス語・フランス文学会および各分野の会員の研究の紹介、書評等の三十余年にわたっての担当はここでは全て除いた。「国際アーサー王学会」総会には一九七五年以降三十年間

にわたり総会に出席、ほぼ毎回研究発表を行なってきた。師フラビエ教授の信頼(学問的にも、人間的にも)に答えての努力を重ねてきた。一九八一年、同「学会」(於グラスゴー)での日本支部の承認は、国内の研究者の存在への理解が国際的に漸く追認され始めた時期に呼応する(一九七五年、数名の会員、一九八一年、約十五名、一九九〇年四十六名、この時点で九倍)。その分、健康上の事由も重なって、文部省や勤務先大学の「業績報告書」に自身の論文には関心が届かず記載漏れをきたす事態にも到ってきた……

日本人の、日本に於ける研究が国際的に解放される(知られるようになる)ためにはこの三十余年なくして今日はある程度な答で、研究史認識の欠落が大方にある。学問とは個人の自由が前提であって、「權威」の構築ではないし、「良心」が出発点にある答ではないか?